



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

乳幼児をもつ母親グループを対象とした親支援活動 の評価

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸田,泰子, 田村,毅, 倉持,清美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107288

乳幼児をもつ母親グループを対象とした親支援活動の評価

岸田 泰子*・田村 毅**・倉持 清美**

生活科学分野

(2009年9月28日受理)

I. はじめに

われわれは研究プロジェクトの一環として、カナダではじめられた、0歳から5歳までの乳幼児をもつ親を対象に作られた親支援プログラムである「Nobody's Perfect」(以下NP)¹⁾²⁾³⁾⁴⁾を展開し、その実践報告を行ってきた⁵⁾。このプログラムは、子育て中の参加者がみんなでお互いの子育ての悩みを話し合い、自分にあった子育ての仕方を見つけていくという特色があり、参加者は、プログラムへの参加により、さまざまな変化を実感していた。そして参加者から非常に高い肯定的評価を得、ファシリテーター自身にもファシリテートしたことの達成感という良好な効果が実感できた。NPは親自身のエンパワーメントを高める効果とピアサポート効果にすぐれていることを確認した⁵⁾。

このプログラムは週1回、計7-8回で終了し、その後の評価については報告が見られない。そこでNPの中期の評価を行う目的で、その後のグループを約6ヶ月間フォローアップしたところ、このグループを自主グループへの発展へ導くことが出来た。

今回これらの試みの後、参加者らに面接を行い、それをまとめて報告することにより、実践を振り返り、親支援活動としてのNPの中期的な評価を行いたい。

II. 研究方法

1. 研究対象

A町において著者らが展開したNPを終了した0歳～5歳の子どもをもつ29歳～44歳までの8名の母親

である。

2. 調査方法

上記の8名の母親グループを対象として、NP終了後に月1回の参加型の親支援活動を2008年9月～2009年2月の6ヶ月間にわたり計6回継続した。その内容は、NPに準じた運営方法とした。すなわち1回につき2時間、保育つきで、母親たちは親のみのグループでその日に話し合いたい内容を提示した上で、ファシリテーターの進行のもと、各回、話し合いを行った。ファシリテーターは、NPプログラム時より一貫して、著者を含む固定した2名で担当した。

6ヶ月のフォローアップが終了した後、最終日に、参加者に対して非構造化面接により、この支援についてインタビューを行った。最終日に欠席した1名を除く7名に対して実施した。インタビュー時間は1人あたり30-50分であった。

3. 分析方法

インタビュー内容はボイスレコーダーに録音し、逐語録を作成した。この逐語録をもとに対象者のNPに対する思い、あるいは支援の評価としての内容に着目し、一文章一意味単位としてコード化した。次に各コードの意味内容が類似しているものを集めてカテゴリー化した。

4. 倫理的配慮

NP開始時からこの支援がアクションリサーチとして研究に基づくものであることを説明した上で参加へ

* 甲南女子大学

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

の同意を得た。その後のフォローアップにおいても同様に説明、同意を得て行った。また本研究におけるインタビュー時には、その目的と不参加の場合も不利益を受けないこと、匿名性を確保し、プライバシー保護を厳守することを説明し、録音の許諾を得て実施した。

Ⅲ. 結果

インタビュー内容から、NPに関する評価として125のコードが抽出された。それらを分類し、表に示すように、3つのカテゴリー [育児スキルの向上] [自らの成長と喜び] [仲間づくり] と9つのサブカテゴリー【子どもの成長に応じたアドバイスを得る】【多くの人から体験を聞けることの利得】【子育てについて話し合うことでの振り返り】【話すことによるストレス発散】【他の人の役に立ったという自尊感情の高まり】【親としての成長の実感】【自分の時間をもつことの喜び】【地縁による結びつき】【信頼関係が保たれた中での安心した語り】とした。以下、カテゴリーを [], サブカテゴリーを【], コードを「 」で示した。

1. [育児スキルの向上]

分析の結果、対象者らは、NPとその後のフォローアップにより、自分たちの育児スキルが向上したと感じていた。約6ヶ月という中期的フォローアップ期間で、対象者らの子どもたちも成長した。その期間、対象者らには、子どもの成長発達に伴うそのときどきの不安や疑問がわいていたようである。「子どもが大きくなってきて、NPのときには気づかなかったがあとになってでてきた問題があった」ことから、中期的にフォローを受けることにより【子どもの成長に応じたアドバイスを得る】ことができた。

ある対象者は、育児に関して何か知りたいことがあったとき、「個人的に誰かとあってもそんなにいろんな答えが返ってくるわけじゃないが、8人もいるといろんな答えが返ってきた」あるいは「自分と違った

いろいろな考え方、こういう考えもあるのだ」と【多くの人から体験を聞けることの利得】を認めた。

「普通に生活していたら努力しなかったかもしれないが、次にみんなに会うときに、自分も変わっていないと、って努力しようとした」、「ここに来て、うだうだ言っているようでもなんとなくヒントになったり、自分はこうだったなと思出す場面があって、改めて自分がやってきたことを考えさせられたりした」など【子育てについて話し合うことでの振り返り】を繰り返し、「テーマごとに話し合ったことが生活の場面面で生かされた」と語った。

「本当に話すことが楽しかった」、「子どもなしで大人だけの話がすごいストレス解消になった」など【話すことによるストレス発散】がなされていた。また「これまでノイローゼのようにインターネットを頼りにしていたこともあったが、生の声を聞き、話すことがとてもよかった」と、対面して話すことの喜びも語られた。

2. [自らの成長と喜び]

「自分が経験したことを話すことによって、何か役に立っているかなって思ったら嬉しかった」、「専業主婦でずっといると、人の役に立つというのを実感することがなかった」と【他の人の役に立ったという自尊感情の高まり】もまた語られた。

そして「親子役でロールプレイしたとき、子どもの気持ちがわかったような気がして、それからはなるべく子どもの立場で今、どういう気持ちか考えて対応するように心がけるようになった」とNPプログラムの内容が後の子育て場面で役立っていることを語った。また「子育てのことについて、あまり深く話をするのがなかった。話し合いで解決していったこともあったので、そういうのが自信につながった」と【親としての成長の実感】をしている者もいた。さらに「悩んでいるのは自分だけじゃないってのがわかったらうれしかった。みんな悩んだり失敗していたりってのがわ

表 抽出したカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
育児スキルの向上	子どもの成長に応じたアドバイスを得る 多くの人から体験を聞けることの利得 子育てについて話し合うことでの振り返り 話すことによるストレス発散
自らの成長と喜び	他の人の役に立ったという自尊感情の高まり 親としての成長の実感 自分の時間をもつことの喜び
仲間づくり	地縁による結びつき 信頼関係が保たれた中での安心した語り

かって、自分が悩むことはまちがいでないってわかった」と、育児を前向きに捉えるようになっていた。「悩むことがいけないとか、悩みを早く解決しようじゃなくて、楽しみながら悩む、悩みながらも楽しんでるって思えると悩むのが怖くなくなった」という語りもあった。

「子どもをみてもらうことで、親だけで和やかな話し合いができた」、「子どもと離れる時間を持ち、子育てに振り回されてしまうという現状の中で、自分の時間を持つことはすごくいいリフレッシュとなった」、「子どもと一緒にいたら、いつも子どもに気がいってしまう」ことから、ここで過ごす時間の中に【自分の時間をもつことの喜び】を見いだすことができた。「母親であっても、自分を大切にすること、私は私って気づかせてくれたことが大きい」、「子どもとの時間は、誰も縛っていないのに自分で締め付けてた部分が多かった」とも語られた。また「自分が犠牲になることで周りが丸く収まるならそれでいいと思ってきたのが、考え方が変わって、毎日がとても楽しくなった」と母親としての自分だけではない生き方を考えるようになった者もいた。

3. [仲間づくり]

「A町は小さな子が集まって何かするところって少ない。閉鎖的で。」や「仲間ができたことは大きい。近所だしすごく仲良くなった。それが一番だった」、「NPのメンバーとお茶したり、重なっていく場所も増えてきて、そこでもまた輪が広がった」、「みんな身元が知れてるからこの地に（引っ越してきたのだが）馴染めるかもと思えるようになった」と【地縁による結びつき】に満足していた。「ここに来るお母さんたちは子どものことを真剣に考えている。そういうお母さんがいるってことがわかってほっとする」、「日常ではいいにくいことでもここでは言えるって言うのが（ここには）ある。居心地がいい」など【信頼関係が保たれた中での安心した語り】を自覚していた。また「NPの最初のプログラムだけではなくて、半年のフォローのお陰で友達同士の集まりが深まった」「みんな腹を割って話してくれたから、私も腹を割って話せた」、「このメンバーのいいところは、きついなって言うこともはっきり言ってくれる。普通だったらよくないってことも、話をあわせるってこともあるだろうけど、はっきりそれをやめてこうしたらいいんじゃないってしてくれる」とフォローアップ期間をもったことによって、仲間同士の関係性が深まったことを認識していた。

IV. 考察

1. NPプログラムの中期的評価

今回、A町においてNPプログラムを展開し、その後約6ヶ月間のフォローアップを実施した。すでに筆者らはNPプログラムの実施後評価として、参加者の感想とファシリテーター記録から、親自身のエンパワーメントを高める効果、ピアサポート効果を確認した⁵⁾。また柴田の報告⁶⁾では、精神的健康度が高まる、育児不安感が減少するという効果も明らかにされている。しかしながらこれらは短期的な効果を評価したものである。そこで今回中期的な期間のフォローアップ介入により、評価を行った結果、参加者らがNPプログラムを意識した育児行動場面を持っていることを確認することができ、支援効果が持続していることがわかった。また参加者らはNPプログラム後の介入により、【子どもの成長に応じたアドバイスを得る】ことを評価として挙げていた。子どもたちは成長を遂げつつあり、親もまた親としての成長を遂げている。したがって、その成長に応じて、戸惑い、不安も生じてくることが考えられ、継続した支援の重要性が再認識され、本介入が効果的であったことがわかった。

NPは親教育のためのプログラムである。したがって、参加者らが親として、人として[自らの成長と喜び]を感じていたことは意義深い。【親としての成長の実感】だけでなく【他の人の役に立ったという自尊心の高まり】などは、おそらく短期的なNPのみのプログラムだけでは実感することのできない体験であろう。半年という期間をもってはじめて、親たちは自らの成長を実感し、そして子育ての後輩にあたる人々に対しても自らの体験を語れるようになっていた。このような個人の成長とともに、仲間同士の関係性の深まり、さらにグループ自体が成長できたこともまた中期的フォローアップの賜物といえるであろう。

2. 育児支援のあり方

A町は若い世代が多く、新興住宅が多い割りに行政による子育て支援は手薄であり、また親子が集う場も少なかった。そのため、NPプログラムの実施は非常に重宝され、喜ばれたのであるが、このNPで知り合ったグループメンバーは、その後、フォローアップ時間以外のときにも、集うようになったという。もともと仲間を欲していた親たちが集まってきたということもあろうが、【地縁による結びつき】がさらにそれを強化し、近所の遊びスポットと一緒に出かけたり、会える時間に集まったりというグループ活動が始まった。

話しにくいことも話せるようになったという言葉もあったように、関係性が深まることで、信頼関係も築かれ、より深い話もできるようになっていた。NPプログラムの展開時より、一段と深い仲間グループが形成され、フォローアップ期間後には、自主グループへと発展したのである。一方で、子育て中の母親が「地縁」をもつほど、有効な支援を得られていると感じ、「地縁」のない環境では不安や疲労感が増す、という報告がある⁷⁾。子どもを育てている間は、遠くへの外出もままならないことからご近所感覚でのおつきあい、地縁の大切さがわかる。今回の介入では、A町という小さな町での支援に地縁が生かされたと感じている。インターネットや携帯電話が発達した現代であっても、距離感というものが育児サポートには重要であることが示唆される。参加者らは【地縁による結びつき】を深め、信頼できる仲間を得てサポートグループとしての自立を歩み、今後ピアサポートを強化していくと予測される。

ところで富岡ら⁸⁾は、育児支援に必要なものの1つとして家族内サポートを高めるための方法、を挙げている。このことは、単に知識や育児方法を提供するようなサポートではないことを意味している。今回の介入評価として、参加者らが【自らの成長と喜び】を語ったことにより、母親としてのエンパワーメントが一層高まり、そのことは家庭において夫や他の家族にとっても良好な関係性を築く基盤となるのではないかと考えられる。育児支援において、母親だけでなく家族内での役割調整や家族へのアプローチの重要性を述べられているように^{9) 10)}、今後は、NPにおいても対象を母親だけでなく「家族」として、プログラム内容を構成するなど、応用することが必要であるかもしれない。

謝辞

本調査にご協力いただいた皆様には心より感謝申し

上げます。

また本報の活動は平成20-21年度 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B 課題番号20300233 研究代表者 田村毅)から助成を受け、分担研究の一部として行った。

文献

- 1) 原田正文:「まったく子どもを知らない」まま親になるおや育てプログラムがいま必要になっている. 保健師ジャーナル, 2004, 60 (2), 178-181.
- 2) 原田正文:新しい子育て支援メニュー「親支援プログラム」を展開しよう! 対人関係の脆弱性を改善するために. 保健師ジャーナル, 2004, 60 (12), 1228-1231.
- 3) 原田正文:親支援プログラム“Nobody’s Perfect”とは? 保健師ジャーナル, 2007, 63 (9), 774-777.
- 4) Nobody’s Perfect Japan ホームページ <http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/index.html>
- 5) 岸田泰子, 井上幸代, 田村 毅:太子町における親支援プログラム Nobody’s Perfect の展開, 甲南女子大学研究紀要看護学・リハビリテーション学編, 2008, 2, 119-128
- 6) 柴田俊一:親教育プログラムNobody’s Perfectの短期的効果について, 子どもの虐待とネグレクト, 2006, 8 (1), 114-118.
- 7) 岡本美和子:出産後2~3週の子どもの持続する泣きに直面した初産婦が情緒的動揺に至る要因の構造分析, お茶の水医学雑誌, 2006, 54 (2), 55-70.
- 8) 富岡晶子, 前田留美, 新町豊子:育児支援に関する研究の動向と課題, 川崎市立看護短期大学紀要, 2005, 10 (1), 1-10.
- 9) 前原邦江, 大月恵理子, 林ひろみ他:乳児をもつ家族への育児支援プログラムの開発 — 出産後1~3ヶ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価 —, 千葉看護学会誌, 2007, 13 (2), 10-18.
- 10) 吉田敬子:母子と家族への援助, 妊娠と出産の精神医学金剛出版, 東京, 2000.